

有 森 信 二

僕は、初めて弔辞というものを讀んだ。

目の前には、ほんの三日前まで、僕たちのリーダーとして、当然のごとくに君臨していた健太の、いつも見慣れた野球帽の下の顔が笑っていた。

僕は読みながら、手が震え、足が震え、声が震えて、とうとうその場に蹲ってしまった。

健太は、十二人兄妹の十番目だった。ずんぐりした体軀に似合わず、やけにすばしっこく、ボールは力まかせに投げ込んでくるし、相撲は低い姿勢からのカチ上げを得意とし、チャンバラも赤胴鈴之助ばりの無類の強さを誇っていた。

健太の家は、村に一軒しかない雑貨屋を営み、父親は村会議員の長老であった。歳の頃は五十半ばで、四角い顔の上にポマードで撫でつけた頭があり、村人の噂では、他に二人は隠し子がいるということだった。

健太は人を束ねることに長けていて、同年代の仲間七人のボスとして君臨し、七人を集めては、その日その日の遊びの指示をした。なにしろ、グローブを持っているのも、

少年画報や漫画王を持っているのも健太だけであるのだから、みんな否も応もないのだった。

野球になると、ピッチャーで四番バッターは健太と決まっていた、雑貨屋横の小学校の校庭に、隣村のチームを呼びつけた。

チーム「アトムズ」の残りの二人は、健太のすぐ上の兄と、すぐ下の弟が加わり、彼らも健太の指示に従順に従った。

ピッチャーの健太は、球はめつぼう速いがストライクがなかなか入らず、毎回といってよいほど押し出し点を与える替わりに、バットを持つと強打者に変身し、四、五点のハンディなどすぐにひっくり返すのだった。

もちろん、アトムズのみんなも打撃にかけては負けておらず、ホームランの数では女房役の僕の方がいつも上回っていた。

だからか、負けん気の強い健太も、僕には一目置いていて、ノーアウトランナー、二塁の場面でも、絶対バントのサインなど出さず、強振しろという指示のままに、僕は殆ど長打を放ち、期待に込えてきた。

僕の家は、七人の中で最も貧しい小作農であったから、少年画報や冒険王など買ってもらったことがなく、もちろんグローブがほしいなどと口にすることも出来なかった。健太は、そんな僕に、決まって自分が讀んだ後すぐに漫画

を貸してくれ、新しいキャッチャーミットも揃えてくれた。

七人の中に、修二という一級下の子がいた。修二も浅黒く、ずんぐりした体躯で、どうかした拍子には健太と見間違ふことがあった。足の速いことも、すばしっこいことも、健太によく似ていた。

修二は小学校下の小さな家に住んでおり、母は村に三軒だけしかない飲み屋の一軒に勤めており、まだ娘のままだと言われるほどに若かった。村人の間では、修二の母と健太の父親とが深い仲であるということは知れ亙つており、事実、父親は飲み屋に入り浸りで、小学校の下の家から朝早く帰る姿が度々目撃されていた。

健太は、修二にはいつもぞんざいであった。野球だとライオトで九番、グローブも使い古しで、漫画も最後の最後になった。いつぞやは、修二の放った打球がライナーで土手を越えて飛んでいったのを、ファールだと言い張り、そのため隣村のチームに勝ちを譲ってしまう結果になったが、自分の目に狂いはないという主張を貫いた。

子供用の自転車を持っているのは、雑貨屋だけだった。健太の持ちものという訳ではなく、兄妹たちの共有なのだということであったが、三角乗りで校庭をすいすい飛ばしているのは、いつも健太だった。自転車はさすがに何度頼

んでも、俺のものじゃないからなと言ひ、僕には貸してくれなかった。

しかし、僕がサヨナラ満塁ホームランを打ち、大逆転勝ちをした日、なにかほしいもんはないかと言ったので、すかさず一回だけ自転車に乗せてほしいと頼んだ。健太は、最終回に押し出し四球を三つも与えていた引け目があつたのか、渋々承知した。

初めて自転車を手にした僕は、二輪しかないこれが、いかに御しがたいものであるかをすぐに知った。ハンドルがぐらつく。ペダルに足を乗せると、とんでもない方に車輪が進み、勢い余つて倒れ込む。

よろよろと校庭の端まで行つたときである。ジャキーンとけたたましい音をたてて自転車は横転し、あわてて引き起こしたとき、僕は頭から血の気が引くのを覚えた。

ハンドルは醜く歪み、足元のチェーンが外れてしまつていたのでした。

僕の肘や脛からは血が吹き出ていたが、そんなことはどうでもよかつた。

どうしたものかと思案しながら、雑貨屋の裏手まで戻ると、元の位置に自転車を置き、事実を健太に告げることなく、そのままフルスピードでその場を走り去ってしまったのだ。

いったい、弁償するにはいくらかかるのだろう。親に相

談すれば、ただでは済まない気がする。それより、健太にはどう言えればいいだろう。このままだったら、健太の僕に対する怒りが炸裂するに決まっている。

それはそれでいい。しかし、僕は、自分の過ちをほったらかしにしてきた。とんでもない卑怯者ではないか。

僕はとって返した。健太は、店先でバットを振っていた。

「自転車のことだけぞ」

「ああ、修二の奴がな、めちやくちやにしやがった。チェーンは元に戻せたんやけど、ハンドルは曲がったままや。しばらく、使いもんにならない」

「そのことで、僕」

「さっきな、修二の奴が、壊れとるみたい、この自転車、言うて引つ張ってきたのよ。訳を聞くと、どうも奴がハンドルをいじっているうちに、グニヤリと曲がってしまったちゆう。俺は、なにやつとるんや、誰の許可があつて、お前などが自転車にさわれるんや、と怒鳴つてやつたわい」

健太は、本気で怒っていた。その証拠に、ブルンと体が一回転して、反動で転げるくらいにバットを振り回したのだった。

健太の乗った自転車が、小学校下の二十メートルもの崖下に落ちたと聞いたのは、翌日の朝のことだった。

村ではめつたに見ることのない救急車がサイレンの音を響かせ、近くで止まったかと思うと、隊員の一人が、頭から血を流している健太を崖下から抱え上げ、大急ぎで町の診療所に運んだ。

兄弟の一人に聞いてみると、健太は、「修二の阿呆めが」と怒鳴りながら、壊れた自転車を朝早くから修理していたのだそうだ。なんとか恰好がつかるところまで直つたので、試しに三角乗りで漕ぎ出したらしい。

ところが、ハンドルがぐらつき、校庭に向かう筈のところろが、砂利道の方に逸れてしまい、そのまま崖を転げ落ちてしまったというのだった。

飛んできた大人に抱えられた僕は、「違う、違う」と叫んでいた。しかし、「修二は関係ないんだ」ということばが出なかった。

会場の一番後ろに、修二が項垂れて立っているのは知っていた。修二の母も、これ以上ないというふうに小さくなつていて、白いハンカチが濡れそぼっていた。

アトムズのメンバーも、なにがなんだかわからないという顔で、肩をすぼめていた。

村会議員のポマード頭の父は、読経が済み、焼香とやらが済み、場内のざわめきが静まったところで健太の写真を背中にして立ち、

「私は、健太に助けってもらったのかも知れません。忙しい、忙しいと言って、金と物さえ与えていけば、子供は勝手に育つと思ひ込んでいました。私は、健太とまともに向き合つたこともないのです。健太と話をしたこともありませぬ。こうやって写真を見てさえ、実感がわきませぬ。私は、健太を本当に知らないのです」

ポツリポツリと喋り出した。

ポマード頭の下の四角い顔が、僕の目には斜めに歪んで見えた。ずんぐりした健太によく似た体軀の男が、一人ぼつちで立ち、喋っていた。

みんなが建物の外に出た。

健太が入れられている甕が、大人たちの手で運ばれてきた。あちこちで、すすり泣きの声があがった。

これから、小学校裏の墓地に向かうのだという。小学校裏の墓地なら、僕も知っている。椎やヤマモモの木が鬱蒼と茂り、昼間も日の光が射すことのないところだ。

健太は、その木々の下の深く掘られた穴に埋められるのだという。

会場を出ようとするとところで、健太が使っていたという茶碗が敷石に叩き付けられた。

「堪忍しろよな」

誰かが言った。

僕は、大人に抱き留められたまま、甕の後を追うこともせず、割れた茶碗をいつまでも見詰めていた。

了